

スイス日本語教師会研修会報告書

「むらログ」管理人
村上吉文

なぜテクノロジーを利用するのか

皆さんこんにちは。

このセミナーの最初のコマは「なぜテクノロジーを利用するのか」というタイトルでお話をさせていただきたいと思います。



まずこの写真を見てください。砂漠の中に一枚のドアがあって、その向こうに青い海が広がっています。ドラえもん「どこでもドア」のようなイメージですね。

インターネットで色々な人につながっている人は、おそらくこうしたドアで全く違う二つの世界が繋がっていることに気づいていると思います。なぜテクノロジーを利用するのか、僕にとってはこのドアを開いてその向こうに行ってみることができるからです。そしてこの二日間のセミナーの終わった後には皆さんにも僕と同じようにこうした風景が見えることを祈っております。

例えば、このセミナーに来る日の朝から今日の昼休みまでの間にも、以下のようにたくさんの学ぶ機会がありました。3月15日の朝、僕がカナダを発ってスイスに来る日の朝ですが、この日はZoomというオンライン会議のツールを使って、「日本語教育オンライン実践報告会」というイベントがありました。講師は国際交流基金マドリッド日本文化センターに最近までいらした近藤裕美子さんでした。僕自身もオンラインで様々な研修を行っているの、これは非常に勉強になりました。

次は移動中だったので参加できなかったのですが、同じくZoomというツールを使った「やさしい日本語おしゃべり会」というイベントがありました。タイトルの通り、やさしい日本

語を使って日本語を母語としない人がおしゃべりをするという企画です。このおしゃべり会はほぼ毎週行われています。これ自体は教師研修ではないのですが、僕は今現場から離れているので、こうした機会は積極的に利用しようと思っています。

昨晚スイスに着きましたが、スイス時間の今朝5時半からは、「海外日本語教育学会」の研究例会がライブ中継されていました。非漢字圏の日本語学習者が、どのように漢字を身につけたかを教師ではなく学習者自身が語るというイベントで、これは僕だけではなく、おそらくスイスの日本語教師のみなさんにとっても参考になる研究会だったのではないかと思います。もちろん録画で後からご覧になることもできます。

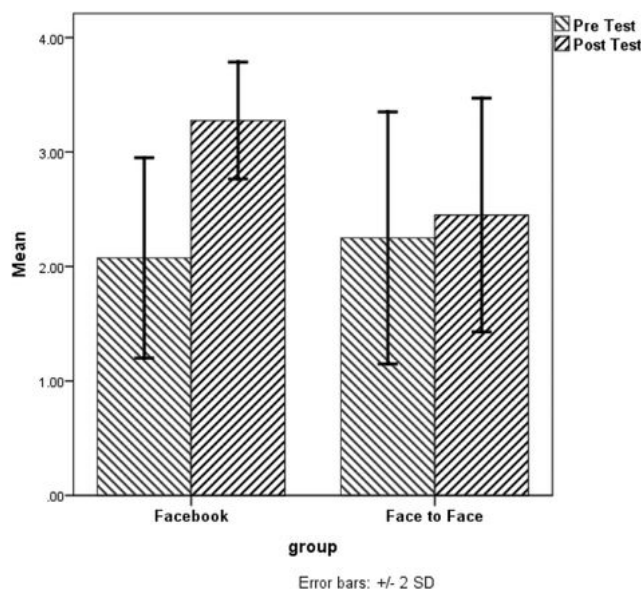
そしてこれは今日の昼休みですが、Twitterで教育関係者の大規模なチャットがあります。毎回何百という大量の投稿で1時間の間に意見交換がされます。これはトピックにもよりますが、基本的には教師の情報交換なので大変貴重なリソースになることが多いです。

テクノロジーを使うことのメリット

では次に、教育機関でテクノロジーを利用するとどのようなメリットがあるのかを「学習者」「教師」「社会」の三つの視点から考えてみましょう。

学習者にとってのメリット

まず学習者にとってですが、テクノロジーを利用すると成績が上がるという結果がいくつかの研究から報告されています。例えばElham Akbariらによる「Student engagement and foreign language learning through online social networks」では、ペルシア語の母語話者を対象にした英語の授業で、全く同じコンテンツを学んだのにも関わらず、教室内だけの共有と、Facebookを通して成果物を共有したクラスでは、コースの前はむしろ教室内で共有したクラスの方が成績が高かったのにも関わらず、コースの後ではFacebookを使ったクラスの方がはるかに成績が良かったという結果が報告されています。



Student engagement and foreign language learning through online social networks | SpringerLink

<https://link.springer.com/article/10.1186/s40862-016-0006-7>

次に、テクノロジーを使えばいつでもどこでも勉強できるというメリットがあります。特にスマートフォンを利用した語学学習の発展は顕著で、例えばduolingoというアプリでは英語話者向けの日本語学習コンテンツのダウンロード数が563万となっています。国際交流基金の日本語教育機関調査による調査では、海外の教育機関で日本語を学んでいる人の数は360万人ほどですから、それよりはるかに多い数の日本語学習者がこのひとつのアプリを使って学んでいることとなります。一般的に学校の先生とは教室内でしかコミュニケーションができませんが、こうしたアプリを使えばベッドの中でも風呂の中でも通勤中에서도いつでも語学の勉強ができるわけです。これはたとえ優秀であっても学校の先生には真似のできない能力です。

スマートフォンにインストールするタイプのアプリとは別に、MOOCという学習の機会もあります。これは大規模公開オンライン講座（Massive Open Online Course）のことで、日本ではJMOOCという機関が複数のMOOCのコンテンツをまとめて紹介しています。日本語学習のMOOCのコンテンツとしては、国際交流基金による「みなと」が開発されています。

こうした流れは公教育にも波及しており、例えば高校では「N高等学校」などが大きな人気を博しています。勉強の全てがオンラインで可能で、クラブ活動などもオンラインです。講師も一流の人が勤めていて、例えばアニメ化や映画化もされたソードアートオンラインという小説の作者、川原礫さんがライトノベルについての授業を担当していたり、サッカー部の特別顧問が元サッカー日本代表の秋田豊さんだったりします。今年2月の時点ではまだ1年生と2年生しかいないのにも関わらず、すでに4790人の生徒数を抱えています。技術を使うことによって一流の先生から多くの生徒たちが学ぶことができるようになっている結果ですね。

学習者にとってのメリットの三つ目ですが、自分の好きなコンテンツで勉強できるという点も見逃すことができません。例えば Google+（グーグルプラス）というソーシャルメディア上にはアニメや漫画やゲームを通して日本語を勉強しようというグループもあります。

Learn Japanese through Manga, Anime, and Games - Google+
<https://plus.google.com/communities/100379889147661298516>

また Facebook の「日本語」というグループでは自分の好きな歌手の歌う歌の歌詞をひたすら翻訳していくことによって日本語を勉強している学習者も見受けられます。自分のわからないところをこのグループで確認しているのです。

YouTube でも同じように日本の漫画やゲームを通して日本語を教えるチャンネルが人気です。例えば以下のチャンネルでは現時点で5000人近い登録者がいます。

TRUNKS Manga - YouTube - YouTube
https://www.youtube.com/channel/UCH_jKWThXrTg6Kjg1Sbw-HQ

こうして自分の好きなコンテンツを通して日本語を学んでいる人達は世界中の色々なところにおいて、例えば、このスイスにもアマンダさんという人がやはりアニメなどを通して日本語を勉強したということを僕のインタビューで話してくれています。

スイスの冒険家、アマンダさんインタビュー！ - YouTube
<https://www.youtube.com/watch?v=iyTSMivnGFA>

ちなみに僕自身もカナダに来る前はハンガリーにいたのですが、ハンガリー語を勉強する時はハンガリー語の映画をよく使っていました。中でも、このベルンで1958年に起きたハンガリー大使館占拠事件を題材にした映画は内容としても非常に印象的でハンガリー語の勉強にもなりました。

以下の映像は、僕が初めてハンガリー語で話してみた時のものです。まだハンガリーに来る前でエジプトの首都カイロで撮影しました。ハンガリー語のわかる人はこの会場にはあまりいらっしゃらないと思いますが、少なくともある程度の長さのまとまったことを話しているということはお分かりいただけるのではないかと思います。

冒険家メソッド ハンガリー語で話してみた - YouTube

https://www.youtube.com/watch?v=9WrGIMZ_9gk

テクノロジーを使うことの学習者にとってのメリットの四つ目ですが、自分が一番必要としている教師から教えてもらえるという点もあります。学習者のニーズというのは非常に多様で、日本語教師の能力も非常に多様です。例えば私が自分の強みを活かしたコースを開発するオンライン研修を実施したときには、日本に滞在しているクリスチャンに特化したコースなど、非常に多様な内容が提出されました。「天にまします我らの父よ」で始まる「主の祈り」などが日本語でできるようになることを目的としていますが、こうしたニッチな分野に特化したコースは、テクノロジーを利用して色々な場所にいる学習者と日本語教師がつながることによって初めて可能になります。

学習者にとってのメリットの五つ目ですが、他の日本語話者と友達になれるということを上げておきたいと思います。従来技術では、文通などで海外の日本語話者とコミュニケーションするには返事が戻ってくるまで何週間もかかるのが普通でした。インターネットが発展してメールでやり取りできるようになると、時間的な問題はなくなりました。そしてブロードバンドの発展により、文字だけでなく映像と音声でコミュニケーションすることができ、しかもそれが録画ではなくリアルタイムに話し合うことができるテレビ電話のシステムが普及しています。海外にいる日本語話者はもはや遠い海の向こうにいる存在ではなく、同じ教室ですぐ隣で一緒に勉強しているような距離感なのです。

教師にとってのメリット

では教師にとってはどんなメリットがあるのでしょうか。教師にとっても色々なメリットがありますが、やはり一番大きい変化は仕事が楽になるということではないかと思います。例えば簡単な小テストならもはや教師が採点する必要はありません。誰でも無料で使えるGoogle クラウドルームやGoogle フォームに自動採点機能が付いているので、4択問題や漢字の書き取りのようなテストなら、もはや人間の教師が採点する必要はないのです。

作文の添削はまだコンピューターに任せることは難しいですが、Lang-8やHelloTalk などのお互いに添削することができるソーシャルメディアやスマホのアプリなどを使って、目標言語の母語話者によって学習者の作文を添削してもらうことができるようになってきました。成績管理なども、Googleクラウドルームをはじめとする無料のLMS(学習管理システム)によって、自分で計算したりする必要はなくなっています。

私が日本語教師になったばかりの頃は、使った絵パネルを元の順番通りに並べ直す作業があったりして非常に非効率でしたが、今ではこうした教材をデジタル化・クラウド化することによってこうした非生産的な作業にかかる時間はかなり軽減させることができるようになりました。

社会にとってのメリット

最後に社会にとっては、どのようなメリットがあるのでしょうか。

その一番大きな恩恵は、落ちこぼれがいなくなるということです。なぜなら落ちこぼれというのは一斉授業を前提にした現象で、一人ひとりが自分のペースにあったスピードで勉強すれば、その定義から落ちこぼれと言われる生徒は存在しなくなります。そしてそうした個別学習には ICT の利用が欠かせません。

また、いじめや発達障害などによる社会性の問題から学校に行けなくなる、もしくは積極的に学校に行かないことを選択している子供たちにとっても、学校のシラバスに沿った動画を YouTube で一つ一つ見ていくだけで、学校に行かずに家で勉強を進めることができます。

今までは落ちこぼれや不登校などにより社会参加の機会が奪われていた子供達も、こうして学習の機会を与えられることにより、積極的に社会に参加し、納税者として社会を支えていくことができるようになります。一方で、こうした技術を取り入れずに社会参加ができないままであれば、税金を払うどころか生活保護などによって社会の負担になってしまう可能性もあります。つまり結果的には教育機関がテクノロジーを積極的に取り入れることは社会の安定につながっているのです。

時代背景

さてこのようなメリットを享受できるようになったのは、最近の時代背景によります。

インターネットの普及

その中でも最も分かりやすく目につくのはテクノロジーが普及したという点でしょう。例えば国際交流基金の海外の拠点で行ったアンケートでは、カイロやハノイなどの途上国を含めても全体で80%を超える受講者がほぼ毎日インターネットを使っていると回答しました。

技術の発展

このように普及した理由の一つは技術の発展です。例えば、1995年に私が初めて購入した自分のパソコンはメモリが8MBしかなく重さは23kgもあり、値段も25万円程度していたのではないかと思います。一方では私が今使っている2016年のiPhone7はメモリーは250倍

の2GBで、重さは167分の1であるの138gしかありません。値段も10万円を切っています。このように性能は数百倍にも進歩しているのに価格も重さも劇的に下がっているのです。

ユーザーインターフェースの向上

使い勝手も非常に簡単になりました。私が最初に購入したパソコンはキーボードとマウスで操作していましたが、今はキーボードの代わりに音声入力で文章を書くことが簡単になりましたし、マウスの代わりにタッチパネルで画面を直接触って操作することができるよう

になりました。私の娘も鉛筆が握れるようになる前に、ニンテンドーDSのタッチパネルでひらがなを覚えました。

学習コンテンツの普及

また学ぶコンテンツもいくらかでも無料で手に入るようになりました。iPadやiPhoneのアプリ、音声を聞くためのPodcast、そしてAmazonのKindleにより海外の教科書なども買おうと思ったら1分後には読むことができるようになっています。

スピードが求められる時代

またこれは前に述べた使い勝手に関係するところですが、時代背景の一つとしてスピードが求められる時代になったということもあると思います。例えばKindleやiPhoneなどでは知らない言葉を1秒ほど長押しするだけで自動的に辞書が引けるようになっています。また、ChromeやFirefoxなどのインターネットブラウザにインストールするタイプの辞書を使うと、マウスを知らない単語の上に持っていくとまさにその瞬間にその言葉の意味や漢字の読み方などが表示されるようになります。これは非常に驚異的なスピードで、KindleやiPhoneの1秒間の長押しですら、とても遅くてまどろっこしく感じられるようになってしまいます。

シェアリングエコノミーの時代

またAirbnbやUberのようなシェアリングエコノミーの時代という背景についても考えておかなければなりません。AirbnbもUberも「サービスの提供者とユーザーが直接つながる」ことによって効率化を図っているということができます。シェアリングエコノミーとは言いませんがYouTubeがテレビ局の代わりになったり、iTunesやGoogle PlayやAmazonがCDショップや本屋さんの代わりになっているのも同じ時代の変化ということができるでしょう。こうしたことを考えると、教師と学習者さえいれば必ずしも黒板や教室やチャークが必要になるとは限らないという現実が見えてくるのではないかと思います。

変化のスピード

時代の変化が早くなったことも、こうしたテクノロジーを利用しなければいけない理由の一つとして重要です。以前は大学を出た時の知識だけでも定年まで仕事できていた時代も

ありましたが、現代は時代の進化のスピードが速く、学校を出た後も常に自分で最新の情報をフォローしておかないと、すぐに時代遅れになってしまいます。そのためにも Twitter などを使って最新の情報を発信している人をフォローしていく必要があります。そして自分とは意見の違う人ととも議論を交わすことができる時代です。私が大学生の頃はオーディオリングとコミュニケーションアプローチの支持者が対立していましたが、それでも一つの論文に対する反論がその翌年に出たりするようなスピードでした。現在は Twitter で意見の違う相手と1日に何往復も議論を重ねることができます。

長時間の勉強が必要な時代

それと関連して、競争が激化して、勉強のために投資しなければいけない時間が長くなっているのも重要な視点です。文法書を丸暗記するような勉強方法ではなかなか長時間続けることができませんが、リアルタイムにフィードバックされるアプリや、ゲーム感覚で学べるコンテンツを使えば能力投資のために長時間を使うこともできます。

教育のパラダイムシフト

最後に教育に関する概念が大きくパラダイムシフトを起こしていることにも触れておかなければなりません。

一番大きな変化は、やはり従来の文型シラバスから行動中心アプローチへと教育界の軸足が移動していることにあるでしょう。文型アプローチでは言語知識の習得がゴールになっていますので、教科書だけでも十分に言語に関する知識は得られるのですが、行動中心アプローチでは実際に教室の外で何ができるかがゴールになりますから、例えば日本人と友達になったとか日本語でメールを書いたなど、教室の外につながる活動が必要になります。そのためには教室や教科書だけでは限界があり、インターネットなどのテクノロジーを活用する必要があります。

また教授法の基礎に心理学と言語学があった時代から、現在は第二言語習得を基盤にした表示法が中心になりつつあります。そのためには大量のインプットが必要で、一冊の教科書だけではなく、大量の音声教材や、前述したブラウザ埋め込み型の辞書などのようなツールを応用した読解の活動なども必要になってきています。

教師の役割が変化したことも教育機関で技術を応用しなければいけない理由の一つになっています。インターネット以前は情報へのアクセスが極めて限られていたので、学校では教師が情報のリソースとして学習者に知識を移転するという役割を担っていました。その後、インターネットの発展により身の回りに情報が溢れるようになってくると、情報リソースとしての教師の役割はなくなり、どのような情報を見つけなければならないのかを教えるために良い問いを立てることが教師の役割とされてきました。これは例えばマーク・プレンスキーのパートナー方式などで有名です。しかし最近になって、むしろ学習者にこそ良い問いを立てる能力が必要なのではないかという声が強くなり、教師は学習者が良い問いを建てるための支援者としての役割が期待されるようになっていきます。こうした考えはDan RootsteinらのQFT(Question Formulation Technique)が有名です。

以上、テクノロジーを利用することのメリットとそれをもたらした時代の変化について、このコマではお話ししました。

このコマでお見せしたスライドはこちらです。

<http://goo.gl/FVs2NQ>

#satchatのログ紹介とZoom体験

研修の2コマ目はQFTという質問を作るための活動に当てる予定でしたが、前日のスイス日本語教師会役員の皆様との話し合いで、急遽、Zoomというテレビ会議システムを体験することになりました。

#satchat

Zoom体験の前に、この日の昼休みの間に、米国東海岸在住の教育関係者等を中心に意見交換が行われる#satchatが開催されていたので、そのログを確認する活動を行いました。このチャットは毎週米国東海岸の時間で土曜日の朝7時半から行われています。その週によって様々なトピックの意見交換が行われます。この日はリーディングがトピックだったようです。このチャットのログは以下のリンクからご覧になることができます。

<https://twitter.com/search?f=tweets&vertical=default&q=%23satchat>

なお、同じような日本語教師の間のチャットとしては「#日本語教師チャット」というものがあり、詳しくはこちらをご覧ください。

<https://sites.google.com/view/jt-chat/>

Zoom体験

Zoomはお互いに顔を見ながらインターネットを通して遠くにいる人と話し合うことができるサービスです。ミーティングをホストする人以外はアカウントを持っている必要もありませんし、ホストも40分に1度ミーティングを終了させなければいけないという制限がありますが、基本的には無料でサービスを使うことができます。また小さいグループに分かれてディスカッションをしたり、ホワイトボードに共同で書き込んだり、自分のプレゼンテーションを表示したりといったオンラインで授業するための基本的な機能も備わっています。ChromebookやMacやWindowsなどのパソコンでアクセスする場合はこちらのリンクからになります。

<https://zoom.us/>

iPhone や Android などのスマートフォンからアクセスするには「Zoom Cloud Meeting」というアプリをインストールする必要があります。

このコマでお見せしたスライドはこちらです

<https://goo.gl/9MPyhH>

(※スライドには「QFT形式」についての内容が含まれていますが、セミナー当日は「Zoom体験」に講義内容を変更していただきました。)

明日から使えるアクティビティ（教室編）

研修の3コマ目は「明日から使えるアクティビティ」についてご紹介します。ソーシャルメディアをはじめとするテクノロジーは自律的な学習に非常に効果的ですが、それについては明日のコマに譲るとして、ここでは一般的な教室での活動について考えてみたいと思います。

第二言語習得

その前に、こうした活動の基礎となる考え方として第二言語習得について少しお話ししたいと思います。

第二言語習得は非常に多岐にわたる分野なので、短い時間でご紹介することはできませんが、もし一冊だけ非常に読みやすい本をご紹介しなければならないとしたら、白井恭弘先生の『外国語学習に成功する人、しない人—第二言語習得論への招待 (岩波科学ライブラリー) Kindle版』をご紹介したいと思います。これは研究者向けに書かれた専門書ではなく、どなたでも読めるように書かれた一般書なので、すらすらと読み進めることができます。これは電子書籍になっているので、ご興味のある人はインターネットにアクセスしてダウンロードして今すぐ読み始めることができます。

では、以下に簡単にこの本から引用してみます。

第二言語習得という分野で、いちばん大切なことは「大量のインプットと少しのアウトプット」ということです。30年前に僕が学生だったころは「アウトプット仮説」というのが非常に有名で「大事なのはアウトプット」ということだったのですが、最近の研究ではむしろインプットの量のほうが大事だということが分かってきました。

ここでいうインプットというのは読んだり聞いたりすることです。逆に書いたり話したりすることがアウトプットです。ただし、何でもいいから読んだり聞いたりすればいいのかというとそうでもなく「理解できるインプット」が大事だといわれています。また、「少しのアウトプット」が必要だともいわれていますが、これは「リハーサル」という頭の中だけで行われるアウトプットも含まれますので、実際にアニメだけ大量に見て、まったくアウトプットしなくても、いつの間にか日本語が流暢に話せるようになっているという例もあります。

この本では大量のインプットと少しのアウトプットに関しても様々な実証的な研究が紹介されています。例えばカリフォルニア州立大学のジェームス・アッシャーがスペイン語学習に

関して「授業の70%は聞く活動、20%は話す活動、10%が読み書きに費やされるにもかかわらず、聞く、読む能力は伝統的なオーディオリンガル教授法で教えられた学生の三倍のスピードで習得され、話す力、書く力も劣らない」という研究結果を残しています。

また、アメリカの国防省の言語研究所バレリアン・ポストフスキーの研究で、「話すことを四週間遅らせた聴解優先のグループが、最初から話す訓練を受けたグループを総合力で上回り、また訓練を遅らせた話す能力も勝っていました。」という例も紹介されています。つまり、たくさん話したり書いたりするよりも、たくさん聞いたり読んだりする授業のほうがいいわけです。

しかし、ここでとてもよくある誤解を防ぐために申し上げますが、インプットというのは先生の文法についての説明ではありません。できるだけたくさんの「日本語」を聞かせたり見せたりする必要があります。実際にその行動ができるかどうかが大切なので、他の場面でどう使うかなどの説明はしてはいけません。説明はあくまでも、その行動を支援するという目的から外れないようにしてください。

具体的な活動例

それでは具体的にどのような活動を教室で行えば、こうした大量のインプットと少しのアウトプットを実現することができるのでしょうか。一冊の教科書だけでこうしたことを行うのは非常に難しいので、やはりインターネット上のリソースを使うことが重要です。例えば自己紹介の仕方を教えるのであれば、YouTubeを「自己紹介」「初めまして」「よろしくをお願いします」などで検索すれば大量の実例を見つけることができます。その中から短い動画を4本ほど選んでみましょう。検索するときに、短い動画だけを選ぶ検索オプションを使うとそういった動画だけを見つけることができます。

そしてまず最初に、特にタスクなしで4本を聞かせてみましょう。再生速度を調整して0.5倍ぐらいまでスピードを落として聞くと聞きやすくなる場合もあります。また、この4本の動画の再生リストを作っておくと、再生する時にあちこち移動したりしなくて済むのでとても楽です。

次に、「はじめまして」を言うかどうかだけに注目して4本を見てみましょう。予め以下のようなプリントを配布しておくときき込みやすいですね。

タスク1「はじめまして」

- 動画1 言いました 言いませんでした
- 動画2 言いました 言いませんでした
- 動画3 言いました 言いませんでした
- 動画4 言いました 言いませんでした

こうした文字を読み取るのは自己紹介の能力とは関係ありませんから、こうしたプリントはもちろん媒介語を使ってもいいのではないかと思います。

次に「よろしくをお願いします」を言うかどうかだけに注目して4本を見てみましょう。これも上と同じようなプリントがあると楽ですね。

同じように、3回目のタスクとして「名前を言うかどうかだけに注目して4本を見る」、そして4回目のタスクとして、「職業を言うかどうかだけに注目して4本を見る」も行ってみましょう。

最初のタスクなしで視聴したときも合わせて、4本の動画を5回見たら、全部で20回も自己紹介の動画を視聴したことになります。これが大量のインプットになります。

もし動画が一本しかないときはループ再生という機能を使うと、こうした大量のインプットを簡単に行うこともできます。

初級後半以降の大量のインプットを実現するための教室活動としておすすめなのは、CBI(Content-Based Instruction) やCBL(Content-Based Language Learning) と呼ばれている学習方法です。こうした学習方法の具体的な活動を、例えば映画やアニメなどの映像作品に限定して簡単なレベルからリストアップしてみると、以下のように多様な方法があります。

- 見るだけ。聞くだけ。
- 文字起こしを頼む
- スクリプトを読む
- スクリプトを翻訳
- 分からないところを仲間に質問
- AnkiやQuizletに新しい言葉を入れる
- 書き写す（スクリプトをそのまま書く）
- 音声を一時停止して、音読
- 音声を聞きながら同時に文字を見て音読
- スクリプトを音声入力してみて発音を練習
- 音声を聞かないで文字だけで音読
- 文字を見ないでシャドーイング
- 映像を描写する
- 要約する
- 感想を書いてSNSなどに投稿
- そのコンテンツに批判的な投稿を見つけて反論

大量のインプットは、上記のような音声教材だけに限りません。文字教材を中心にした大量インプットを行うための教室活動としては多読があります。多読の中でも一番簡単なのはInstagramを自分の好きな言葉で検索してそのキャプションを読むというものです。この場合はわからない言葉があっても、写真がないTwitterほどストレスにはなりません。初級前半の場合は自動翻訳やRikaikunなどのブラウザ埋め込み型の辞書を併用することによってストレスを軽減させることができます。

写真などのない文字が中心の多読用の教材としては、印刷物の他に国際交流基金「kcよむよむ」があります。こちらのリンクから多読用の教材を無料でダウンロードすることができます。

<http://jfk.jp/clip/yomyom/index.html>

ソーシャルメディアを利用とした文字による日本語のインプットとしては、Twitterのハッシュタグを利用することが便利です。オリンピックなどの世界的なイベントのハッシュタグを探してリアルタイムで読んだり、Twitterのトレンドを地元ではなく日本に設定すると、日本でどのようなハッシュタグが流行しているかを知ることができます。こうした方法に関しては以下の研究がわかりやすいです。

Solmaz, O. (2017). Autonomous language learning on Twitter: Performing affiliation with target language users through #hashtags. *Journal of Language and Linguistic Studies*, 13(2), 204-220.

<http://jlls.org/index.php/jlls/article/viewFile/644/311>

英語が苦手な方のために、簡単な日本語での解説もブログで消化してありますので、ご興味のある方はこちらをご覧ください。

むらログ:第二言語習得におけるハッシュタグの3つの使い方

<http://mongolia.seesaa.net/article/454797260.html>

中級レベル以降の文字による日本語のインプットに効果的なツールとしてはソーシャルブックマークというものがあります。ソーシャルブックマークというのはブラウザにお気に入り登録する機能がありますが、これをみんなで共有するという方法です。たくさんの方が

お気に入りに入れている Web ページは、注目されるだけの理由があるはずですから、そうしたウェブページを選んで読めば、毎日面白い Web ページを読み続けることができます。日本でははてなブックマーク (<http://b.hatena.ne.jp/>) というソーシャルブックマークが一番有力です。

このコマでお見せしたスライドはこちらです。

<https://goo.gl/44DcYM>

ソーシャルメディアのリスク対策

このコマではソーシャルメディアのリスク対策についてお話しいたします。

まず最初に、インターネット以前のパソコン通信の時代からオンラインコミュニティに関わってきた人間の一人として申し上げますと、実際にソーシャルメディアを通して何らかの被害を受けてしまうということはほとんどありません。私の周りでも具体的な事例としては、レイバンというサングラスのブランドの偽イベントの広告をばらまいてしまうとか、他害性の障害（双極性障害、反社会性パーソナリティ障害や行為障害、素行障害など）のあると思われる人からひどいコメントをもらうようなことは確かにあります。しかし、それらには対応方法もあります。そして、それ以上のリスクを避けるためにソーシャルメディアを使わなくなってしまうことにも実はリスクがあります。

リスクを避けるリスク

これはソーシャルメディアの例ではないのですが、リスクを避けることが新たなリスクを生んでしまう有名な例として、911と呼ばれている米国の多発同時テロの後の交通事故による死亡者の増加の例をご紹介します。これはドイツのGerd Gigerenzerという研究者が「Dread Risk, September 11, and Fatal Traffic Accidents」というタイトルで発表した論文です。中身も以下のリンクから読むことができます。

<https://pdfs.semanticscholar.org/3ea1/ec429263efaf817e5ed972c192308214c6dc.pdf>

この研究によると、911のテロの後、人々が飛行機に乗ることを避けた結果、飛行機よりも死亡リスクの高い自動車の利用が増え、そのために増えてしまった自動車事故の死者数は911のテロの犠牲者の数すら超えてしまっているとのこと。

ここで考えなければならないことは、テロによる犠牲者はメディアを通して大きく報道されるので印象に残りやすい一方で、自動車事故による死亡者の増加はほとんど報道されることはないということです。これと同じことがインターネット上のリスクについても言えます。インターネットを介した犯罪は、そうでない犯罪に比べてニュースなどで目につきやすいため、そうでない犯罪に比べて非常に多く発生しているように感じられてしまうのです。しかし実際にはサイバー犯罪というのはそれほど多くありません。平成29年版の警察白書によると、平成28年中のサイバー犯罪の検挙件数は8,324件に過ぎず、全検挙件数337,066件に比べると全体の2.4%にしか過ぎないのです。

従来リスクとの比較

また、ソーシャルメディアを使わなかったとしても、従来の教育機関にも実はそれなりにリスクはあります。例えば警察庁の「平成28年の犯罪」という調査によると職業別の検挙人員の中で「教員」に該当するものが578名もおり、その中には凶悪犯12名も含まれているのです。

現在ではなぜか犯罪として扱われていませんが、体罰による怪我也毎年報告されています。文部科学省の「体罰の実態把握について（平成27年度）」という調査によると、発生件数1,126件で、「傷害あり」は216件もあり、骨折・捻挫などの重傷の例も24件あります。子供同士のトラブルももちろん大きなリスクのひとつです。文部科学省の平成28年度「児童生徒の問題行動不登校など生徒指導上の諸課題に関する調査」という資料によると、小・中・高等学校における暴力行為の発生件数は59,457件であり、児童生徒1,000人当たりの発生件数は4.4件だそうです。また、小・中・高等学校及び特別支援学校における、いじめの認知件数は323,808件であり、児童生徒1,000人当たりの認知件数は23.9件であるという数字もあります。

こうした数字を見ている限り、ソーシャルメディアだけが取り立てて危険ということは全くありません。むしろ、具体的な数字で示すことはできませんが、ソーシャルメディアを恐れてしまうあまりに、他者とつながるツールを使わなくなってしまつと、その結果による学びの機会の損失こそが最も大きなリスクであると私は考えています。

リスクを取れるようになるための7つのステップ

とは申し上げてもソーシャルメディアに慣れていない先生や学習者にとって、いきなりインターネットで発信しようと言っても無理があるでしょう。そのためには最初はゼロから始めて、少しずつインターネット上の露出を増やしていくという戦略を取る必要があります。具体的にはこのような七つのステップを考えてみると良いと思います。

1. 見るだけ、読むだけ、聴くだけ
2. アカウントを作るだけ（発信しない、フォローしない）
3. 発信を始めるがフォローしない（Twitter）
4. フォローを始める
5. 安全なコミュニティで活動する（FB）
6. ブロックやミュートを身に着ける
7. 荒野に送り出す

ではこのステップのそれぞれについて考えてみましょう。

まず最初は何も発信しないで、受信だけするタイプのソーシャルメディアの利用です。これは「明日から使えるアクティビティ」のコマで色々な例をご紹介いたしました。アカウントを作らなくても利用できるソーシャルメディアの代表的な例としては、YouTube、Twitter、Instagram、Wikipedia などがあります。Wikipedia に関してはアカウントがなくても書き込むことすらできます。

次はアカウントは作るが、情報発信はしない段階です。これが便利なのは特に Twitter です。Twitterでは有益な情報を発信している人だけを教師が選んでリストを作ることができます。例えば以下のリストは村上が教育関係者の皆様に共有しているリストです。今夜の晩ごはんなどの個人的な情報をあまり発信しないで、専門的な情報を中心に発信している人たちをリストにしています。

<https://twitter.com/Midogonpapa/lists/leadingeducators>

慣れてきたら学習者たちに自分でもリストを作ることを勧めてみましょう。たとえ何も投稿しなくても、自分でリストを作るためにはアカウントが必要です。ただ、この段階で大切なのは、リストを作っても誰もフォローしないということです。リスクを避ける上でこうした方法が重要なのは、Twitterで誰かをフォローしてしまうと、その相手からダイレクトメッセージを受け取ることができるようになるからです。まだソーシャルメディア上のリス

クを取る準備ができていない学習者の場合は、こうした外部から見えないコミュニケーションは避けなければなりません。アカウントを作ると公開された場所でその人宛にコメントすることはできるようになりますが、幼児性愛者のような犯罪者はそうした公開された場所での活動を嫌いますから、こうして透明性を上げることにより、学習者たちを守ることができるようになります。

次にまだ誰もフォローしないままで、投稿を始める段階に進んでみましょう。一番リスクが少ないのは宛先のないツイートです。これはほとんど独り言のようなものですから、誰もフォローしていない段階では他のユーザーに読まれる可能性はほとんどないと考えてもいいです。ただし検索結果には現れますので、その投稿に含まれるキーワードで検索した人の目に触れる可能性はあります。

この段階に慣れたら、次はハッシュタグを付けて投稿してみましょう。ハッシュタグは自動で検索結果へのリンクになる文字列のことで、必ず「#」から始まるようになっています。例えば以下のリンクは「#スイス」というハッシュタグの検索結果で、色々な人がスイスについて投稿しているのを見ることができます。

<https://twitter.com/search?f=tweets&q=%23%E3%82%B9%E3%82%A4%E3%82%B9>

ハッシュタグにも色々な人が読むものと読まないものがあります。しかしハッシュタグをつけることで、人々に読まれるようになる可能性はかなり上がります。

誰もフォローしていない段階での最後の戦略として、他のユーザーにコメントすることがあります。これはかなり積極的な働きかけなので、ほぼ読まれると思っていいです。ただし必ずコメントが返ってくるとは限りません。

ここではフォローをしない状態で発信を始めるという方法についてご紹介しましたが、実際にはその逆に「人々をフォローするが発信しない」というタイプのアカウントもあります。ただしこれはセキュリティの上から言えば、外部からは見えないダイレクトメッセージを送られる可能性があるため、よりリスクは高いといえると思います。

ではいよいよ他のユーザーをフォローするという段階に進んでみましょう。この段階では前にも申しあげましたように、他のユーザーから非公開のダイレクトメッセージを受け取ることができるようになります。学習者が受け取るダイレクトメッセージの内容は教師が確認することはできませんが、学習者が誰をフォローしているかは外部から観察することができます。もし学習者がフォローしているユーザーのリストの中に、不審なアカウントを見つけたら、そのアカウントのタイムラインを開いてどのような人物か確認してみましょう。そしてさらに不信感を持つことになったら、学習者に対してなぜこのようなアカウントをフォローしているのかを聞いてみるといいと思います。

語学学習のためのソーシャルメディアといえば、Facebook などよりもTwitterの方が匿名やニックネームで利用できるし、複数のアカウントも作れるのでおすすめなのですが、Facebook は実名制なので、問題のあるアカウントに遭遇する可能性はあまり高くありません。その意味でも Facebook を日本語学習に勧めることもあるでしょう。その場合はハッシュタグではなくグループを使って他の日本語ユーザーと交流を進めることが安全です。もし大規模なグループを紹介するとすると、名実ともに世界一の規模である Facebook の「日本語」というグループがおすすめです。ここは管理人が非常に厳しく悪意のあるアカウント

を排除していますので、かなり安全なコミュニティと考えて良いでしょう。リンクは以下の通りです。

「日本語」

<https://www.facebook.com/groups/The.Nihongo.Learning.Community/>

安全なコミュニティとしてもう一つご紹介しておきたいのは、「海外旅行好きサークルwith国際交流」です。ここは日本語学習を目的としたグループではありませんが、海外に関心のあるユーザーが多く集まっていて、中でもスイスは観光地としても注目度が高いので、スイス人の日本語学習者が投稿したら間違いなく多くのコメントなどをもらうことができるでしょう。また、このグループも管理人が手間暇をかけて悪意のあるアカウントを退会させているので、上記の日本語グループと同じように安全なコミュニティと考えて良いと思います。リンクは以下の通りです。

「海外旅行好きサークルwith国際交流」

<https://www.facebook.com/groups/vamos.a.viajar/>

ここまで、リスクの少ない場所に学習者を誘導するという方向でリスク対策を紹介してきましたが、中には政治的な発言を好む日本語学習者もいます。最近ではネトウヨ（ネット上の右翼）と呼ばれていますが、排他的な投稿をするユーザーがいないこともありませんので、外国人の立場で日本語で政治的な投稿をする場合は、あらかじめこうしたネトウヨたちをブロックしておくという方法も有効です。もちろんこうした相手に絡まれたら躊躇なくブロックすべきであることはすでにソーシャルメディア上の常識ですが、絡まれる以前にブロックしておくとしたリスクをあらかじめ避けることができます。そのためのツールも色々開発されていて、例えば Twitter Block Chainという Chrome の拡張機能を使って、「日本第一党」などのような右翼的なアカウントのフォロワーをまとめてブロックしておくのも良いのではないかと思います。具体的な方法は以下のブログにまとめてありますのでご関心がありましたらご覧ください。

むらログ：「ネトウヨを大量に自動ブロックするには」

<http://mongolia.seesaa.net/article/455158773.html>

ここまでやったら、あとは若い冒険家を荒野に送り出すだけです。もちろん大人から見ればまだ未熟で頼りないだろうとは思いますが、不安な気持ちを抑えながらもその後姿を見送らなければなりません。大切なことは学習者を危険から守ることではなく、少しずつ危険にさらして行って、主に自分の力で、時には他の人の力も借りながら、危険に対応する能力を育てるということです。学校内でソーシャルメディアを通して社会への接点を増やすということは、これまでの温室からいきなりジャングルに子供たちを送り出すような急激なリスクの上昇に比べれば、コントロール可能な環境でリスクに慣らしていくことができるという意味で、むしろ優れた教育方法なのではないかと思っています。

このコマでお見せしたスライドはこちらです。

<https://goo.gl/KLsfqI>

自律学習と教師の役割

この時間は自律学習と教師の役割についてお話しいたします。

自律学習と冒険の関係

その前に本題とは関係ないように思われるかもしれませんが、冒険とは何かについてご紹介いたします。

「冒険家になるには」という著書もある富山県立大学の九里徳泰教授は、チベット高原を初めて自転車で横断するなどの活動で知られていますが、九里さんの冒険の定義は以下の三つです。

一つは他の誰もしないことをするという事です。(独自性)

二つ目は他の人に指示されてやるのではなく自分で計画をつくるという事です。(自主性)

三つ目はリスクをとるという事です。

しかし、伝統的な教育機関はこれとは正反対の方向で子供達を育てています。

例えば、教室の中では全員が同じ教科書を持ち、同じスピードで勉強しています。そして勉強の方法や内容などは、自分ではなく、学校の先生や教育に関する省庁が決められていることがほとんどです。そして一般的には先生の指示通りに勉強していれば、失敗しないで卒業できるようにカリキュラムは設計されています。

しかしこれでは独自性や自主性、それにリスク管理の能力を育てることはできません。また学習者たちの多様性に対応してそれぞれに合った内容や進度で勉強をさせることができません。こうした問題に対応できるのが自律学習です。

自律学習では、他の人と同じ内容を勉強する必要はありません。人間は多様ですから、むしろ自分に最適な内容やスピードで勉強するには、他の人と同じであるはずがないのです。またそれを決めるのは自分です。時には教師が「自分で決めなさい」と指示しなければならないこともあります。学習者の自律性というのはこうして少しずつ育てなければならないので、教師が「自分で決めなさい」と指示をすることは決して自律学習を否定するわけではありません。また、一般的な学習者はコースデザインに関しては素人であることが普通ですから、自分で決めても失敗してしまうことが多いです。しかし、自分に合わないと感じた時点で少しずつ方向を修正して行って最終的にその失敗から自分の学習方法を探し出すのです。つまり自律学習では独自性も自主性の尊重し、かつリスク管理の能力を育てることもできるのです。

先人達の言葉

他人が作ったカリキュラムで一斉に勉強することの限界については、古くから多くの人たちが指摘してきました。例えば、相対性原理でノーベル物理学賞を取ったAlbert Einsteinは以下のように述べています。

"I never teach my pupils. I only attempt to provide the conditions in which they can learn."

また慶応大学の創始者でもある福沢諭吉もアインシュタインと全く同じことを言っています。

「直接に事物を教えんとするもでき難きことなれども（中略）能力を發育することは、ずいぶんでき得べきことにて、学校は人に物を教うる所にあらず、ただその天資の發達を妨げずしてよくこれを發育するための具なり。」（『文明教育論』「時事新報」時事新報社 1889（明治22）年8月5日発行）

ロシアの教育学の研究者として著名なヴィゴツキー（Лев Семенович Выготский）も、その著書『教育心理学講義』において1926年に以下のように述べています。

「厳密に言えば、科学的観点に立てば、他人を教育することはできません」「教育は、生徒自身の経験をとおして実現されます。その経験は完全に環境によって決定されるものであり、そこでの教師の役割は、環境を組織すること、規制することにあります。」

具体例

こうした実践の中で、現在最もよく知られているのは、ジーニアスアワーという枠組みではないかと思います。これは授業時間の20%をカリキュラムとは別の自分自身でテーマを決めた活動に使おうというもので、その流れの一つとしては以下のようなものがあります。

- 1.ブレインストーム
2. 調査
3. まとめ
4. クラスで発表
5. 専門家を探して学ぶ
6. 成果物を作る
7. クラスで振り返り
8. 世界に共有

こうした活動においても、2番5番8番などで教室外の外とつながるテクノロジーの利用が必要となっていることにお気づきいただけだと思います。

このジーニアスアワーという取り組みについては、AJジュリアーニの「Inquiry and Innovation in the Classroom: Using 20% Time, Genius Hour, and PBL to Drive Student Success」という本がおそらく最も有名で、これはKindleで今すぐ読むことができます。

自律学習の流れ

新世代の自律学習者について話す前に、従来の自律学習について短く振り返ってみたいと思います。

従来の自律学習の教科書では、このように書かれていることが多いです。

最初に「なぜ自分は日本語を勉強したいのか」「日本で何ができるようになりたいのか」を考えます。これは一斉授業ではニーズ調査という部分で、教師側の仕事とされています。そして、それに基づいて学習計画を立てます。これは一斉授業ではコースデザインと言われていて、ここもちろん教師の仕事です。

そして、学習計画を時には変更しながら実行し、最後に振り返ります。振り返りの部分も一斉授業では教師がテストを作って採点するので、基本的には教師側の仕事です。

つまり、一斉授業ではこの中の「実行」の部分だけ学習者が行い、後は教師の仕事だったのが、自律学習では全部学習者がやることになるわけです。

こうした従来の自律学習については、各種の書籍が出ていますが、海外で入手しやすいのは青木先生の「外国語学習アドバイジング」です。これは紙では出版されていませんが、Kindleを持っている人はAmazonから買うことができます。もう一冊は自律学習において非常にゆたかな実績のある桜美林大学の『自律を目指すことばの学習』という本です。学術書ではなくて実践的な本で、学習計画表などの書式も含まれています。おすすめです。

ただし、最近の自律学習の流れとしては、もっとシンプルなものも増えてきているように思います。あまり計画などを考えず、手当たり次第に色々な試行錯誤をしてみて、気に入った方法が見つかったらそれに集中して実行するのです。そしてそれに飽きたりあるいはなんらかの問題が出たりしたらもう一度手当たり次第に色々な試行錯誤をして、気に入ったものに集中するというサイクルを繰り返す人が多いです。そして僕自身も、自分の自律学習のコースではあまり意識化や学習計画にはあまり時間をかけないようになっています。そのように変化している理由は、リソースがあまりなかった時代と比べて、現在は無料で即座に手に入るリソースが溢れているからです。色々手を出して実際に使ってみるということがお金も時間もかけずにできるのです。学習計画などに悩むよりもすぐその場で勉強の段階に入ってしまった方が良く考える人が多くなっています。

ではこの試行錯誤の時期にどのようなことをやってみれば良いのでしょうか。僕は主にコミュニティ、コンテンツ、ツールの三つを考えると学習者に入っています。

まず最初のコミュニティですが、これは自律学習の文脈においてはPLN（Personal Learning Network）と呼ばれることが多いです。FacebookのグループやTwitterのハッシュタグなどが中心ですが、もちろん対面できる教師が同級生などもこの中に含まれます。

2番目のコンテンツに関してはOER（Open Educational Resources）と呼ばれることが多いですが、日本語学習の分野で有名なものでは以下のようなものがあります。

1. JF Japanese e-Learning Minato
2. Erin's Challenge! I can speak Japanese.
3. NHK World やさしい日本語
4. Tsukuba University Japanese e-Learning
5. Japanese in Anime & Manga
6. Tae Kim's Guide to Learning Japanese
7. Kanji Memory Hint 2

3番目の「ツール」に関しては、学術的な文脈では、PLE（Personal Learning Environment）と呼ばれることが多いです。具体的には語彙を反復して覚えるためのツール、日本語を書くためのツール、日本語を読むときの支援ツール、会話力を伸ばすためのテレビ会議システムなどです。

語彙を反復して覚えるためのツールとしては、Memrise、Quizlet、Ankiなどが有名です。日本語を書くためのツールとしては、蟻末淳さんが開発された「English IME dictionary for Japanese learners」が非常に効果的ですし、外国語学習者が書いた作文を母語話者が添削するというLang-8というオンラインサービスも非常に有名です。

読解支援ツールとしては、この研修でも既にご紹介しているブラウザ埋め込み型の辞書 RikaikunやKindle の長押しによって表示することのできる辞書なども活用されています。

会話を伸ばすためのテレビ会議システムとしては、これもこの研修で既にご紹介した Zoomや、ホストすらアカウントが必要ないappear.inなどが有名です。

少しずつ始めよう！

このように自律学習において教師の役割は従来の一斉授業とは全く違うのですが、教師の役割を変えていくのもソーシャルメディアの使い方と同じように、一足飛びに変化することは難しいですから、ここでも少しずつ学習者の自律性を高めていくようにステップに分けて考えてみましょう。

まず一番やりやすいのは宿題プリントをやめるという方法です。では何をすればいいかというと、好きなことをさせてその成果物を学校に持って来させるのです。例えば以下のような方法があります。

- テレビや映画を見て、その内容を3行にまとめてくる
- そこで覚えた語彙や漢字のリストを作ってくる
- 日本人の友達と話した（その友達とのセルフィー）
- LINEなどでチャットした人は画面をキャプチャー

こうした勉強方法を考えるのもまだ難しい場合は、DVD や YouTube で日本語の映像コンテンツを見るか、あるいは日本語で書かれた紙やWeb ページのコンテンツを読むかのどちらかを選ぶようにと指示することもできます。つまり「見るか読むか」の二択ということですね。選択肢が少ない方が自律性のない学習者にとっては負担が少ないですから、自律性を育てるための一番最初の取り組みとしては選択肢が二つしかない状況が望ましいでしょう。

また、僕自身は行ったことはないのですが、一週間前の3月10日に、以下のようなツイート見かけました。これも自律性を育てるための第一歩としては非常に良い方法ではないかと思えます。

「春休みの宿題は『ほしい人にだけあげる。けどもらったら絶対提出すること』
と言ったら担任クラスの学生27人中18人がもらって帰っていった。」

<https://twitter.com/sainatsu/status/972470826523017216>

次に授業の一回分だけお試しに自律学習にしてみるという方法もあります。

これはルーマニアのブカレスト大学に国際交流基金から派遣されていた栗原幸子さんと竹内智美さんによる報告ですが、以下のリンク先で発表の全部を視聴することができます。

「学習者それぞれの力を伸ばすには？」

竹内智美、栗原幸子（中東欧日本語教育研修会2017）

https://www.youtube.com/watch?v=UDLxNhTbt_Q

予め通知しておいてから授業の一回分を学習者の希望する内容で自習させたところ、日本語の歌の歌詞を翻訳したり、村上春樹のオリジナルの日本語の本を読んだり、日本のドラマを見たりする学習者がいたそうです。アンケートでは概ね肯定的だったそうで、否定的な意見の中には、グループ活動を求めている人があったそうです。この場合は一回だけの自律学習で、日本語のコンテンツを読んだりする個人的な学習に集中していたのでこのような否定的な意見も出ていますが、本来の自律学習では意見交換などのグループ活動をした

い人は同じニーズのある人たちと集まってグループを作り会話や意見交換などのグループ活動を行うこともよく見られます。

コースの中の特定の時間だけクラス全体で自律学習にするのではなく、クラスの中の特定の学習者だけ自律学習にするという方法もあります。一定の基準以上の学生に「教室には来い。でも、授業には参加しないで別のことをしていてもいいし、今までどおり参加してもいい。自分で決めろ」と言うのです。これも最初は一日だけから始めると良いでしょう。一日だけの場合は、授業の最初に「今日はこれをやります」と教師に知らせ、授業の最後には実際にやったことを伝え、そして、実際に作った語彙リストなどの成果物も教師にコピーを提出させます。

長い期間の場合は、その期間の最初に学習計画書や評価計画書などを書かせ、毎時間ごとに上記のような成果物を共有させ、期間の最後に計画書通りに自分自身で評価を行ってもらいます。

また、授業のコンテンツはすべて教員が用意するものの、学習進度だけは学習者が個別に勤めるという方法もあります。これも4日ほど前にツイッターで見かけたのですが、フィリピンのセブ島で日本語を教えている教員が、以下のような投稿をしていました。

「自習用アプリ、教材、音源等全て事前に渡して「好きなだけ進んでいいよ」と伝え「学んでいくペース」を100%学習者に委ねた初級クラス。3日目にして既に進みに個人差が出ているが、満足度は高い。つまりみんな自分のペースで勉強したいということ。手綱を引いてはいけないし、進みを煽ってもいけない。」

https://twitter.com/Vagabonding_99/status/973883722754703360

このように学習者の自律性を育てるにはいろいろな段階があるのですが、村上の行っている実践は基本的にクラスの場合と時間以外は全てを学習者が決めるというタイプのものです。このコマの最後に、ブダペストでの実践例をご紹介します。と思います。

この自律学習のコースは一般的な一斉授業ではなかったため世界冒険家協会ミーティングという名前と呼ばれていました。毎週火曜日の午後7時から8時半までの90分間で、7週間でひとつの学期とし、年間に4学期がありました。全体で28回です。コース全体の流れとしては、学期の最初の日に62種類のデジタルバッジを使って学習計画を立て、次の週からはそれぞれが自分の希望する勉強の方法を採用して勉強し、最後の週にデジタルバッジとポートフォリオによる振り返りを行っていました。デジタルバッジというのは、コース中に達成した活動の一覧で、詳しくはこちらをご覧ください。

むらログ「宝箱システム 多様性の中の評価」

<http://mongolia.seesaa.net/article/454841589.html>

1日のクラスの流れとしては、最初にデジタルバッジと自己申告による一週間の振り返りをクラスメイトに話します。次にその日にやりたいことを共有します。会話をしたい人はここで相手を見つかったりグループを作ったりします。そして時間の大部分は学習に費やされ、クラスが終わる前に実際に今日どんな勉強をしたかを共有し、来週までにそれぞれが自分どのように勉強したいかを宣言します。

このような自律学習のコースは実は一人一人にきめ細かいケアが必要なのでそれほど楽ではありません。イメージで言うと、従来の一斉授業が給食のようなものだとしたら、自律学習のコースは料理教室のようなものです。しかもそれぞれが別の料理を作っている料理教室です。もちろん給食には給食でいろいろなメリットがあります。子供達に十分な栄養を安価に補給することができる制度だと思えます。僕自身も小学校の時に大好きな給食の

おばさんがいました。ただ、やはりこれだけ市民が多様化した現代では、宗教の問題やアレルギーの体質などがありますから、皆で同じ食べ物を食べるというのにはもう無理があります。学校では栄養を補給するよりも料理の仕方を身につけさせた方がこの時代には子供達の幸せにつながるのではないのでしょうか。

このコマでお見せしたスライドはこちらです。

<https://goo.gl/BGLBtR>

明日から使えるアクティビティ（つながり編）

二日間にわたる研修も最後のコマとなりました。このコマでは「明日から使えるアクティビティ」というタイトルでお話ししますが、昨日の教室編ではなく、教室の壁を越えて学習者が直接他の日本語話者とつながることができるようになる活動をご紹介しますと思います。

この研修の最初のコマでも申し上げましたが、ソーシャルメディアで学習者がその言語の僕は者と繋がるようになると、それまでその国の子供たちしかいなかった教室が、その国の子供たちの隣に一人一人その言語の母語話者の子供たちが座っているような状況になります。そしてこのような状況では、従来の外国語学習過程のパラダイムが大きく転換することになります。従来は、まず学校で習い、それを暗記し、そして機会があれば実際に使うという順番でした。しかし現代の外国語学習過程はまず最初にその言葉を使ってみるという段階があります。そして実際に使えたらそれを調べ、これからも使えそうだなと思ったら覚えるというような段階です。

しかし、実際に自分の隣に日本人が座っているように感じられるようになるには、いくつかのステップが必要です。ここでは、Twitter を使って日本人と親しくなるための6つのステップをご紹介します。

しかしその前に、なぜTwitterを使うのかを考えてみましょう。Twitter は Facebook や Google+などと違い、実名制ではありません。つまり個人情報を全く出さずにアカウントを作ることが出来ますし、すでに作ってあるアカウントがあったとしても、それとは別のアカウントを複数持つことも利用規約上、特に禁止されていません。一方で Facebook や Google プラスでは複数のアカウントを作ることも禁止されています。また Twitter の場合はその大部分がアカウントがなくても読める状態になっています。そしてユーザー数も他のメディアに比べて多く、投稿できる文字数が140文字までと決まっていることも、初心者から使いやすい理由となっています。

さて、六つのステップの最初はプロフィールを作ることです。Twitter のプロフィール欄を見ると、時々自分に関する単語だけをスラッシュで区切って羅列している例を見ることができます。この場合は文法などは全く必要ないので、初級のかなり早い段階から使うことができます。例えば僕の場合は、以下のようになります。

日本語教育コンサルタント / カナダ / ハンガリー / エジプト / モンゴル / ベトナム /
サウジアラビア / ジョギング / 埼玉 / 二児の父 / ソーシャルメディア / 自律学習 /
Chromebook / インラインスケート / ベジタリアン / Kindle /

もう少し文章らしいプロフィールにするなら、このような例文をいくつか作って見せるのはいいでしょう。

カナダ在住の日本語教育コンサルタントです。日本語教師の皆さんとつながりたいです。お気軽にフォローお願いします。

日本語を勉強中のスイス人です。スイス好きな日本人とつながりたいです。お気軽にフォローお願いします。

親しくなるための二つ目のステップは検索してユーザーでハッシュタグを見つけることです。ここでのポイントは二つあります。一つは日本語話者を探すので、当然、検索のキーワードは日本語にすることです。そしてもう一つは、自分に関係のある言葉を検索キーワードにすることです。皆さんの学生さんの場合ならカタカナの「スイス」という検索キーワードももちろんいいでしょう。事前に僕が検索してまとめたリストがこちらにあります。

スイスに関心を持つ人たち - Together

<https://together.com/li/1205964>

ご覧になればわかると思いますが、これらの発言は一週間ほどの間に投稿されたものばかりです。たった一週間ほどの間にも、スイスに好意的な投稿をしている人がこれだけ大量に見つかるのです。スイスの日本語学習者が、この人たちに向けて発信すれば、ごく簡単に肯定的な関係を作れることが予想されるのではないのでしょうか。

さて親しくなるための3つ目のステップは、コメントと質問です。例えば僕が、オランダ出張前にオランダ語学習用の Twitter のアカウントを作って、オランダ語の母語話者に話しかけてコミュニケーションをしているところをご覧ください。

https://twitter.com/Murakami_Dutch/status/739765719869628416

親しくなるための四つ目のステップは、フォローとリスト登録です。リスク対策のところでも申し上げましたが、相手をフォローするとダイレクトメッセージを受け取ることができるようになります。もちろん相手にフォローしてもらったら、こちらから相手にダイレクトメッセージを送ることができるようになります。ただし、ここではまず、フォローの後にすべき事が一つあります。それはリスト登録です。これは日本語学習用の専用のアカウントを開設した時はそれほど必要ではないのですが、もしいつも使っているアカウントで日本人をフォローしたりする場合は、日本語話者専用のリストなどを作っておくと後々便利です。というのも、日本語の勉強をしたい時にそのリストだけを開けば、それ以外にフォローしている人たちの投稿が表示されなくなり、日本語だけの環境を簡単に作ることができるからです。

さて、親しくなるための五つ目のステップは、相手の反応次第なのですが、もしこちらがフォローして相手もこちらをフォローしてくれた場合は、お礼のダイレクトメッセージを送りましょう。内容としては以下のようなものでいいと思います。

「フォローバックありがとうございます！」

これからもよろしく願います。」

ダイレクトメッセージは、外部からは見えないコミュニケーションなので、そうした一対一のコミュニケーションが続いていくと、たくさんいるフォロワーの中の一人という意味ではなく、一人の個性を持った人間として認識してもらうことができます。

そして、親しくなるための最後のステップはビデオチャットです。テレビ電話と言ってもいいでしょう。リアルタイムでお互いの顔が見えて声が聞こえるコミュニケーションです。これは何の用もなしに学習者が呼びかけると、相手がシャイな時には引かれてしまうこともありますので、教師がZoomなどのテレビ会議システムを主催するといいいでしょう。そして、皆さんの学生さんから相手の日本人に、「先生にこういう課題を出されていて困っているので、助けてくれませんか」という形でテレビ会議システムに参加してもらうのです。もちろん、Zoomのブレイクアウトの機能を使って他の日本語学習者と日本語の母語話者が知り合えるようなきっかけを作るのも非常に効果的ではないかと思います。

もし教師がこうしたZoomのイベントを企画するのが難しかったら、「やさしい日本語おしゃべりカフェ」という定期的に行われている日本語学習者のためのZoomのイベントに出ることを課題にしたり、Facebookの「世界のみんと日本語で話そう」というグループで開催されている同じようなZoomのイベントに出てもらうのもいいでしょう。

さて、なぜこのビデオチャットが最終ゴールなのかと言うと、実際にリアルタイムで顔を見ながら話したりすることができる、オフラインで対面したことはなくても、友達になれるからです。例えば以下の動画は、僕が主催していた同じようなオンラインのおしゃべりの会の録画ですが、賑やかな笑い声が起きていて、友達のような感覚であることがご理解いただけるのではないかと思います。実際には、この中で会ったことがあるのは右から二番目に写っている女性と僕だけで、その他はお互いに誰も会ったことがないのです。

にほんごハングアウト24! 「日本人の生活について何を知っていますか」

https://www.youtube.com/watch?v=XpLZ9_3XQ6I&feature=youtu.be&t=62m

さて、これで今回の研修の僕からのコンテンツの提供はおしまいです。最後に皆様、この研修の最初にご紹介した砂漠の中のドアの写真を覚えていらっしゃるでしょうか。砂漠のように見えても、ドアを一枚開けるだけで、その向こうには全く違った世界が広がっているのです。この二日間の体験を通して、皆様がこのドアを見つけてくれたことを願っています。

このコマでお見せしたスライドはこちらです。

<https://goo.gl/dZTRFZ>